

一方、ヒト幼児については、資料の制約上、3、5、7歳の男女10名ずつを選択し、3年間の頭部X線規格写真を用いて同様な計測項目を分析した。両者の成長発育様式の差異については、多変量解析法を用いて、現在鋭意検討中である。

自由：30

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止するための研究

森 治（下北野生生物研究所）
和田 久（佐井小学校）

下北半島におけるニホンザルとタイワンザルの接触を防止する方策は次の2点にしばられる。その1は、タイワンザルの群れの所有がはなれザルの出ないように完全な管理をするか、完全な管理のできる施設に移すことである。その2は、現に群れから離れているタイワンザルおよび1が実行されるまでに群れを離れたサルを発見ししだい捕獲することである。

1については、5月14日には森が中心となり下北地方文化財審議委員協議会の名で県知事あてに要望書を提出した。この段階で、担当課は行政指導で事は解決できるので、条例制定の必要はないとした。その後も世論を背景に働きかけ、8月28日、環境保健部長は早い時期に動管法に基づく条例を制定することを約束した。担当課は、県内の危険動物の実態調査や意見聴取は行ったが、その後の進展はない。

2については、5月13日、東通村の南部、白糠地区で複数の尾の長いサルの目撃情報あり、間において8日間調査に向かったが直接観察はできなかった。その後、6月末から東通村北部での目撃が頻発し、森・和田の調査により直接観察例が増し、森によって2頭の個体識別がなれた。8月中旬以降は西に移動し、むつ市内（よりニホンザルの生息域に近い）に出没するようになり、9月14日、むつ市と東通の境でオス1頭が捕獲された。翌15日、むつ市内で尾の長いサルの目撃情報が寄せられたが発見できなかった。それ以後タイワンザルの情報はない。

2月から4月にかけて、東通村内・むつ市内ではなれザルの情報があつたが、いずれもニホンザルであることが森によって確認されている。

また、脇野沢周辺、半島西北域のニホンザルの夏・冬・春の調査では交雑個体は発見されていない。

今後の課題は、調査研究というよりはむしろ実務として、母群の完全管理を訴えつつ、北上するタイワンザルを確実に捕獲しなければならないし、ニホンザル生息域に進入したタイワンザル、交雑個体の発見に努めなければならない。この作業を誰が行うのか、霊研として検討いただきたい。

自由：31

小さな群れの維持機構

福田 史夫

屋久島西部林道沿いの半山地区に生息するT群は、オス5頭、メス5頭よりなる。このうちのオトナオス3頭とコドモオス1頭を除き、血縁関係が存在する。このような小さなサイズの群れはニホンザルとしては非常に希である。群れの個体間には親密な関係が存在する。この関係が群れを維持し、構成員がばらばらになるのを防いでいるといえる。この親密な関係を一緒に行動する関係と置き換えても良いであろう。1日の生活の全ての場において親密な個体同士が近接しているわけではない。1日の生活を採食・休息の2場面に分け、それぞれの場面での親和関係を明らかにするため2分毎のスキャン・サンプリングをおこなった。

群れを構成する個体間に於いては、血縁的結び付きが強い個体ほど休息中のグルーミングの時間が多いと期待される。本研究結果でも同様の結果を得た。しかし、母娘間に強い結び付きがみられたが、母息子（5歳）間では、移入した6歳オスとオトナメスの結び付きよりも弱かった。

採食中も血縁関係の強いものどうしの結び付きが強いという報告もあるが、移入した6歳オスを含むコドモ間の結び付きが母娘間よりも強かった。また、老メスはメスの中ではもっとも他の個体との結び付きが弱く、しばしば他個体から5・60mも離れて他の個体とは異なった食物を採食し、採食後は大きな声をあげながら本隊を探すことが多かった。

アルファオスを含むオトナオスの採食時は、他の個体から2m以上はなれて単独で採食することが多く、他個体との強い結び付きは見られなかった。オトナオスが他の個体を避ける場合もあった。